

Japanese Literature

24



高見 順集

〈監修委員〉

伊藤 整

井上 靖

川端 康成

三島由紀夫

〈編集委員〉

足立 卷一

奥野 健男

尾崎 秀樹

北 杜夫

(五十音順)

學習研究社

現代日本の文学

24

高見 順 集

全50巻

分割払価格 39,000円

現金価格 35,500円

昭和45年12月1日 初版発行

昭和48年2月1日 八版発行

著 者 高 見 順

発行者 古 岡 秀 人

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4-40-
郵便番号 145 振替東京14203
電話 東京(720)1111 大代表

印刷 大日本印刷株式会社

中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら
文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学係
電話は、東京(03) 720-1111 内線352,353か、東京(03)
727-1600へお願いします。

高見順文学紀行

浅草寺観音堂



浅草なら知っていると私は
つい今言つたばかりだが、
これは食言のたぐいになり
そうだ。しかし、私のそう言
つたのは、京子ではなく
読者にだから、京子には、
「浅草のどこ……？」のほ
んと尋ねた。

(「都に夜のある如く」)



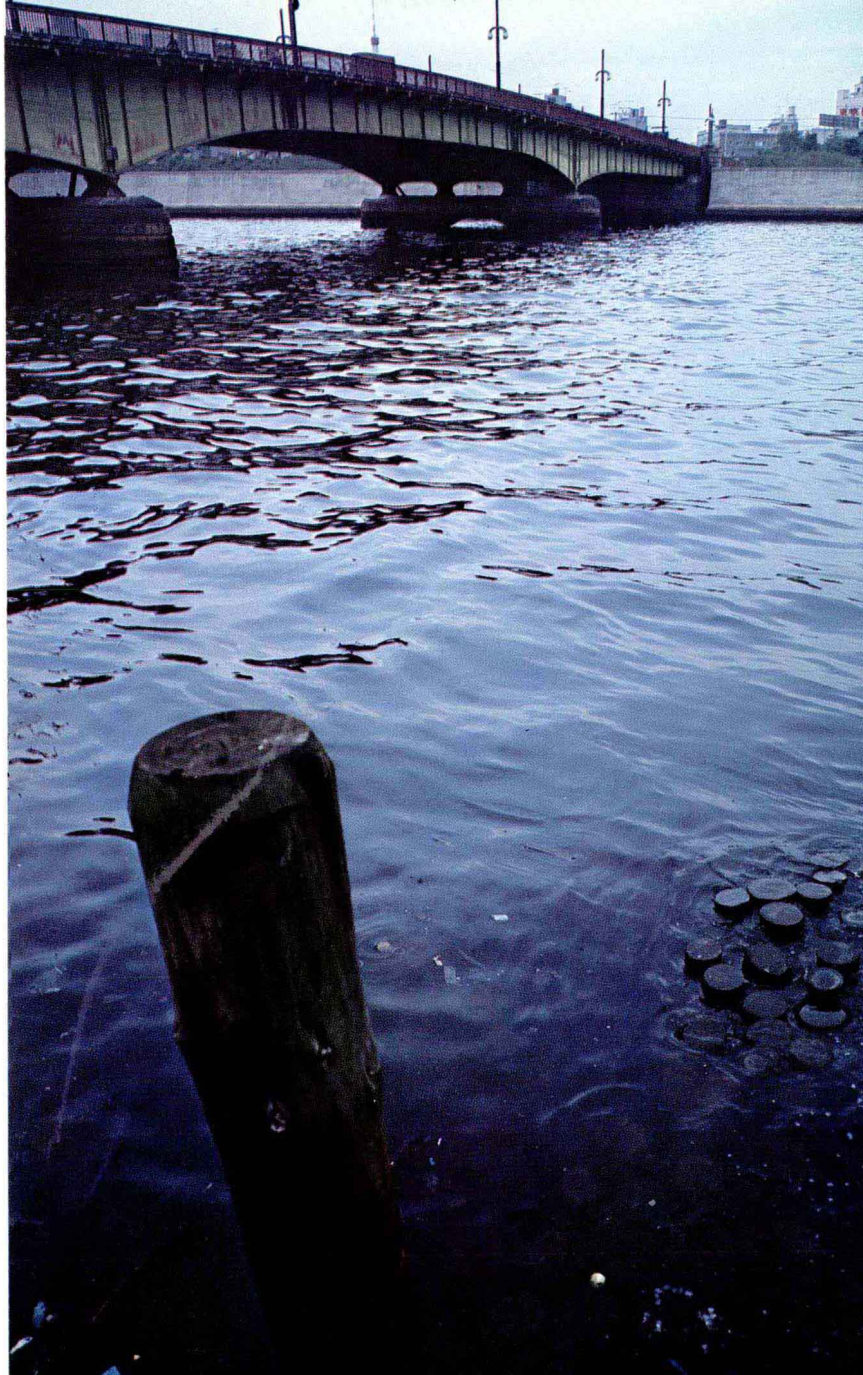
浅草から遠ざかっていること何日位であつたらうか。私のうちに漸く浅草に対する一種の郷愁の感情が鬱積してきた。またぞろ浅草へ行きたくなつた。それは初めは、なんとなく浅草へ行きたいなアといった漠然とした想いだつたが、それがやがて、浅草へ行つてああもしたい、こうもしたいといった具体的な欲望へと進んで行つた。（「如何なる星の下に」）





私は浅草というものに対して涙を流したかったのだ。（「如何なる星の下に」）

浅草・仲見世



浅草の近くを流れる隅田川にかかる言問橋

（「都に夜のある如く」）





上 家は、いかにも常とかわらぬ登校を装って出たのであるが、そしてその日は電車に乗らず徒歩通学の道を習慣的に歩いて行ったが、芝公園の弁天池のほとりに至ると、私は足をとどめてそこに佇んだ。

(「わが胸の底のここには」)

東京都港区芝

右 高見順の墓がある鎌倉・東慶寺境内





十和田湖は想像した以上に大きな湖だった。水が美しく澄んでいて、心までが澄んでくるようだった。

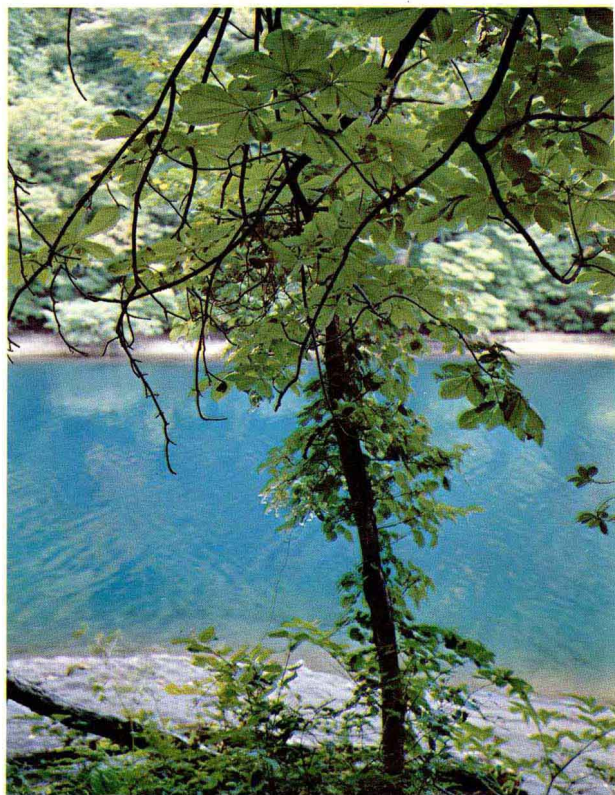
（「陸封魚」

青森 秋田県境にあり、奥入瀬川に流出する

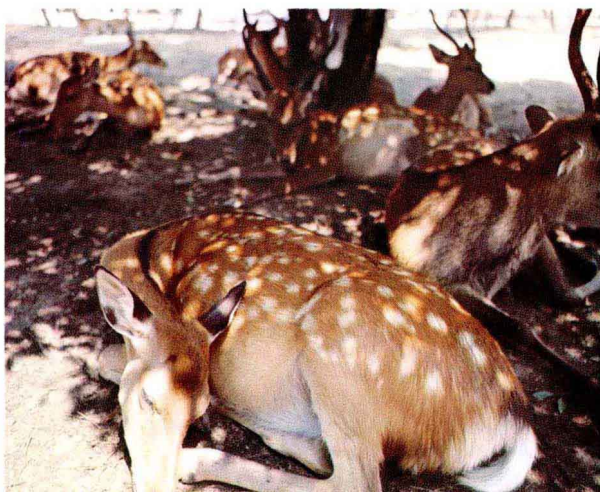
高原は、殆どが薄の穂の白く傾いている雑草原で、耕土に乏しかった。その少ない畑のなかに、さつま芋の畑があった。

（「この神のへど」

左 奥日光の高原。一部は湿地帯で、天然記念物の湿原植物群落が見える







子連れの鹿も見られたが、親鹿に寄り添った、いたいけな子鹿も、こっちに向けたその尻のあたりの毛は、親とそっくりの形の白さなのが、何か私の気持に訴えるのであった。
 (「この神のへど」)
 左 東大寺の南大門の横あたり

東大寺の南大門の横を抜けて、鏡池の手前を右にそれ、小暗い樹間の道を、観音山の方角に向けて昇って行くと、やがて不空羅索観音や日光・月光菩薩で名高い三月堂に通ずる石段があつて、人々が続々と詰めかけて行く。

右 三月堂 (「この神のへど」)

二月堂の高い廻縁めぐりえんの、さらにその上につるされた釣燈籠つりとうろうの鈍い光は、私たちのところまでは届かない。

下 二月堂内部 (「この神のへど」)





庄川は飛騨^{ひた}に源を発し、かの大家族制度で有名な白川村を通して飛騨の国境を出、
加賀を貫いて日本海にそそぐ延長約三十七里の川である。 (「流木」)

岐阜県北部の飛騨山地から富山県西部を北流して富山湾に注ぐ